

## ■ 当面は相次ぐFOMCメンバーらの発言がカギを握る！

前回更新分は、まだ10月の米消費者物価指数（CPI）の結果が明らかになる前のものであったが、「ドルの上値が徐々に重くなっている」という肌感覚に加えて「50日移動平均線や145円前後にあった複数のチャートポイントを下抜けるとムードは一変する可能性が高い」との見立てに間違いはなかった。

実のところ、個人的にはCPI発表前に控えめにドル/円をショートしており、仮に米CPIが弱めの結果であった場合、一旦は「ドシャッとくる」という思いはあった。正直、そこまで筆を走らせることはできなかったが、もし逆に持っていかれても上値の余地は一定程度に限られ、いずれ売り直される局面が訪れるだろうという見立てであった。

それにしても、かなりドシャッときたものである。正味のところ、米CPIの結果自体は「そこまで弱いものだったろうか」とも思える。とはいえ、発表後のロング勢の狼狽ぶりが目に浮かぶことも事実で、かなりまとまったボリュームの見切り売りとストップロス、加えて新規の売りが雪崩のごとく押し寄せた結果と考えれば、今回の急落には合点も行く。

ただ、いまだ米連邦準備理事会（FRB）による追加利上げは終了しておらず、ターミナルレートはまだ少し上にあると考える必要があることも事実と言える。

言うまでもないことだが、なおも日米金利差は拡大余地が残されているし、そう簡単には日本の貿易赤字も解消できそうにない。2022年度の新規国債の発行額が当初計画から7割増の62兆4789億円となるなど、日本の財政規律が一層乏しさを増すなか、超量的緩和策の見直しも容易ではない。

そうしたことを諸々勘案すると、ここもとのドルの下落は“少々行き過ぎ”との感もある。



ドル/円は、米CPIが弱めだったことに加えて15日に発表された10月の米生産者物価指数（PPI）も大方の予想を下回ったことにより、足元では138円台半ばあたりまでの下げを見ているが、そこには一目均衡表の日足「雲」下限が位置しているうえ、同水準は8月2日安値から10月21日高値までの上昇に対する「61.8%押し」の水準でもある（左図参照）。

ちなみに、日足の「運行線」が日々線を下抜けたものの、目下は日足「雲」上限水準にサポートされるような格好となっている点も興味深い。このあたりで一旦は下げ渋り、そろそろアンワインドの動きが見られ始めてもおかしくないといった印象である。

当面のカギを握るのは、一つに足元で相次いでいる米連邦公開市場委員会（FOMC）メンバーらの講演、発言ということになる。実際、14日にはブレイナードFRB副議長が「おそらく利上げペースを減速することが間もなく適切になるだろう」と発言したことで、一時的にもドルが弱含みになるという一幕があった。

今後、ドルにアンワインドの動きが生じるとするならば、ユーロ/ドルの調整リスクは高まるということにもなり、足元で1.0480ドル台まで値を戻してきたユーロ/ドルについては、戻り入りのタイミングを見計りたいと個人的には考える。その場合の下値の目安は、差し当たり1.0200ドル処と見ておきたい。

（11月17日 10:05）